

南蛮寺門前

木下杳太郎

青空文庫

登場人物

童子、順礼等

舞妓白萩

千代

伊留満喜三郎

常丸

学頭

菊枝

所化しよけ長順

老いたる男及び行人二三

所化乗円、其他学僧

うかれ男

老いたる侍

永禄末年のこと。但風俗は必しも史実に拠よらず、却つて今

人の眼に親うするものとす。秋の日、暮がた。後景は京都
四条坊なる南蛮寺なんばんじの高き石垣。そが中ほどよりやや上手
に寄りて門。その扉開かれてあり。門内の広場に木立、そ
を透きてほの灰かに堂見ゆ。門前の街道に童子等集る。

童子等。(唄。)

夕やけ小やけ。

摩訶陀まかだの池の

さんしよの魚は

きらきら光る。

玻璃びいどろのふらすこ

ちんたの酒は

きらきら光る。

鐘が鳴る。鐘がなる。

寺の御堂みだうの

十字の金かねは

きらきら光る。

年少わかき姉妹の順礼御詠歌ごえいかうたひながら下手より登場。姉な

るは盲目めしひなり。

姉の順礼（程よき所に立留り、もの怪しむ気はひ。）何やら怪あや

しい音がするがのう。この近くに海でもあるかいのう。

妹の順礼 何の、姉んねや。京の都には海があるもんかの。

姉の順礼 そんなら河の音か。そや無けりや風かいのう。わしや

滅^{めつ}相^{さう}草^{くたぶ}臥^{たぶ}れた。今日の宿はまだかいなあ。

妹の順礼　そやつて姉^{んね}や。嚮^{さき}からまだ一里とも来やせぬわ。

姉の順礼　何処^{どこ}ぞで歌うたふ声が聞えるやうやのう。

妹の順礼　姉や。此^{ここ}処^こは立派な寺やんどの。何様ぢや知らぬけれども拝んで行かうよ。

姉の順礼　さうかいな。お寺ならば善う拝んで行かうのう。

姉妹門内を覗ひつつ、

妹の順礼　何ていふお寺やろ。遠くに、遠くに立派な本堂さまが見えるわかいよ。

姉の順礼　ああ、わしも一目見たいのう。

妹の順礼　や。姉や。鳥が。鳥が。姉や。はれ鳥があんなに来た

よ。——お日様がもうお隠れやるかいな。——西の天が赤なつた。はれ、血のやうに赤なつたわ。姉や。鳥が仰ぎやうさん山来た。寺の屋根へ留とまつたは。はれ屋根が青うく光つてきた。海のやうに光つて来たわ。

姉の順礼 何ていふお寺かいなあ。

妹の順礼 これ。そこな児こよ。この御寺みでらは何といふ寺かいの。

第一の童子 (蔑さげすむがごとき貌にて。) 名など知らぬわ。

妹の順礼 和子わこは知らぬかいな。

第二の童子 おらも知らぬわ。ははははは。

妹の順礼 ほほ、此土地に棲すんで居やるのに、名も知らぬとは賢

い子等やの。

第一の童子 此御寺おてらの名を知るものは京中にはおぢやらぬわ。た

つて知りたくば中の伴天連ばてれんに聞いて来やれ。ははははは。

妹の順礼 我等わがらは他国のものやほどに教へてくれいのう。

第一の童子 このお寺は唯のお寺ではあらない。

妹の順礼 唯のお寺や無いとて、坊様が住むお寺やろがな。

第一の童子 その坊様は真まことの人間ではあらない。

妹の順礼 ほほ、真の人間で無いのやら、そんなら天狗様てんぐかいの

う。

第一の童子 いやいや、天狗様てんぐでもあらない。もつと怪けしいもの

ぢや。

妹の順礼 分つた。そんなら、そりや狸やろが。

第一の童子 狸でもおぢやらぬわい。

妹の順礼 お時どのよ。もう早はやう行かうよ。わしも奈何どうやら気味
わるうなつて来た。

第一の童子 この寺の方丈ほうぢやうさま様は、おらはまだ見ないが、皆みんなの

いふて居ることによ、髪の毛が鼠の毛で、手の爪が熊の爪ぢや。

第二の童子 それで身の丈が一丈をも超えて、手の甲こけらに鱗うろこが生え
ておぢやるさうぢや。

第一の童子 其くせ声は鳩のやうで、ぐはう、ぐはう、ぐはう、
ぐはうと啼く稀有けぶな方丈様ぢや。

日かげ傾く。南蛮寺の鐘鳴りはじむ。

第一の童子 あれ鐘がなる。鐘がなる。皆みんな早いう去いのうよ。——お

主ぬし達だちも早いう去いなないと、見よ、今に南蛮寺の門に食はれるぞ

よ。恐おそいぞ、恐おそいぞ。昨日きのふも一昨日をととひも人が食はれたさうぢや。

皆、去いなうよ。去いなうよ。

妹の順礼 お時どのよ。我等わがらも早いう行かうよ。

皆々退場。暫く素舞台。遠くにて再び夕やけの唄。

*

*

*

*

千代（年わかき母）、その子常丸下手より物語りつつ登場。
常丸 そんなら、その黒い魚は何処どこに棲んでゐるのぢやえ。

千代 人の心しんの臓の中に居るのぢや。

常丸 それどうが奈何して外へ出るのぢやらうな。

千代 その黒い魚には羽はが生えて、鳥よりも速う、空へ飛んでゆ

くといふことぢや。

常丸 それから奈何するのぢやえ。

千代 河ぢやろが、山ぢやろが、海ぢやろが、日輪ぢやろが、何処へでも飛んでゆくのぢや。その魚が空を蔽へば、日も曇つて、^{そら}天の森に赤児が泣く。

常丸 空に奈何して赤児が泣くのぢやえ。

千代 遠い、遠い、^{とほ}父様や、^{ととさま}ばば様、ちぢ様の国にまゐりたいといふて泣く。

常丸 父さまの国にえ？——^{かかさま}母様、父様の国は空^{そら}天竺におぢやるのかいなあ。

千代 空の、空の、大空の、^{やま}夜摩の国といふところに、ちぢ様も、

父様も、また死んだ其方そなたの妹も、みんな仲くよう暮くらいておぢやる
と、最勝寺様が申された。

常丸 かか様。何といふ国ぢやつたかな。

千代 かか様も善ようは知らぬが、夜摩の国とか申された。

常丸 その夜摩の国に私わしも行きたいわいな。

千代 あれ滅相な、滅相なこと。その国にはな、五つの眼ある恐
ろしい犬が居て、小さい子供には行かれぬ所ぢや。

常丸 (歩み渋りながら。)私わしや其国に行きたいわいな。

千代 こや、常丸。そのやうに聞きわけ無なうては、もはや何処いづくへ
も連れてゆかぬぞや。あれ、入日にも間近いさうな。急いで参
りませう。

常丸 その五つの眼の犬とは、どのやうに恐ろしいものぢやえ。

千代 まあさ、其の話は後あとで詳くうするさかいに、早うまゐりませう。

常丸 母様今日のお会式あしきは面白うおぢやつたのう。私わしやあのやうに面白うおぢやつたのは、生れてから今日が始めてぢや。私わしやまだ見ておぢやりたかつたのに。私わしや家うちへ歸るはいぢや。

千代 まあ、此子としたことが——そのやうな事いふものは、あの恐ろしい犬めが拉さらつてゆきますぞや。家ではばば様が待つておぢやらう程に、早う参らうわいな。

母なる人の友、菊枝、上手より来りてこの母子おやこに摩すれちがひ、

菊枝 はれ、待ちやれいのう。お前は千代さまぢやおぢやらぬか
いな。

千代 あれ、これは菊枝さまさうな。異な所でお遇ひました。

菊枝 お前は何処どこからのお帰りぢや。

千代 今日是最勝寺さまの御会式ぢやさかいに、死んだ娘と、こ
の子の父御ててごの供養くやうしておぢやつた。郷さとの母かかさま様が強きつう止めるゆ
ゑ、竟つい遅つうなつて、只今帰るところぢや。してお前は何処から
ぢやえ。

菊枝 さて其事ぢや。妾わらははな、近いごろ大い苦勞いかをしておぢやつた。
それ、お前も存じよりの黒谷の加門様の妹娘のことぢやが、あ
の娘が気がふれてな。

千代 はれ、まあ。

菊枝 ぎざぎざ針を植ゑたる金具もて、われとわが胸を十字に搔か

い傷つけ……

千代 はれ、まあ。

菊枝 その揚句には親達も、男子おとな、女子をなごも見さかい無う切り付く

るのぢや……

*

*

*

*

二人の女の会話のうちに、常丸、母の傍より離れて南蛮寺の門に近づき、つくづくと内を覗う。やがて小さき常丸の
声にて、

常丸 ほんまかえ。ほんまかえ。ほんまに嘘ではあらないと云ふ

のぢやな。……何ぢや。もつと、もつと、もつと面白い所ぢや
 てや。いやいや夫それは嘘ぢやらうわ。私わしが今日見た地獄からくの機
 関りより、もつと面白いものは唐天竺からにも決しておぢやらぬわ。
 ……何、秋でも冬でも牡丹の花が咲いておぢやるてや。え。わ
 れら父上も、……あの可愛かはい妹も生きておぢやるてや。……
 ま白い象も棲んでおぢやるてや。嘘ぢや。……何、ほんまぢや
 ？ そんなら起請か、懸かけもするてや、好よし、天も地も照覧あれ、
 指かけ小かけ、嘘云ふものは手の指腐され、好し、そんなら入
 って見よう。嘘ぢややら、指十本腐るぞよ。……（常丸門内に
 入る。二人の女未だ氣付かず。）

*

*

*

*

千代 まあ、ほんまに夫れは怪けしいことぢや。今年は何やら可いや厭な
年ぢや。出来秋ぢや、出来秋ぢやと云うて米は不作。

菊枝 それに加旃おほみづまた加茂川の大おほみづ水。——わらは妾が隣ばばさまの祖母様は、きつい

朝みつき起きぢやが、この三月ヶ程は、毎朝毎朝、一番鶏も啼あひだかぬ間
に怪けしい鳥の啼声なみを空に聞くといふし、また人の噂では、先さきごろ頃
撰津住吉の地震強なみく、社の松が数多く折れ倒れたといふこと：
…。

千代 ほんまに気味わるいことぢやのう。あれ、また話で時つぶを費
いた。妾は今日は急ぐほどに、之で御免蒙りませう。お前も精
からだ々体を大事にしや。命あつての物種ぢやのう。さらばまたの日
に会ひませう。

菊枝 それなら祖母様にも宜よろしう云うて下され。

二人相別る。菊枝は下手より退場。忽たちまち千代けたたましく、

千代 はれ、まあ、常丸。常丸。……はて、常丸としたことが、

やよ、常丸。常丸。——（ふらふらと門に歩み寄り、内を覗ひながら。）はて悪いことを致いた。ここが南蛮寺の門ぢやとは、つひぞ気付かいでおぢやつたが……さてはこの門めが、中に引込んだと見ゆるよ……。

千代、逡巡ためらひながら二三歩門内に進み入り、『常丸、常丸』と呼ぼう。答なし。憂はしげに、再び門外に出づ。

千代 四辺あたりには人も見えぬ。はて奈何したものでおぢやらうな。

中に入るのも後うしろめたし……。

思付きたるさまに、急ぎ内より離れ来り、往来に立ち止まり、下手の方を呼ぼう。

千代 おおい、おおい。先さきにゆく菊枝どのいのう。菊枝どのいのう……はれ、聞えぬげな。(躓つまづくが如く、二足三足下手の方に歩みよりて。)おおい、おおい。菊枝殿いのう。(右手を挙げて磨さしまぬ。あ、やうやう聞こえたさうな。やれ、うれしや。なう喃、菊枝どのいのう。早う、早う、菊枝どのいのう。

此時老いたる男下手より来りてこの様を怪しむ貌。

老いたる男 やいの。そなた其方はけたたましう何を呼ぼうのぢや。(額に手を翳かざして、下手の方を眺めやり、また此方こなたを向きて。)何が起つたのぢや。

千代 われら、われら……われら常丸が拉さらはれておぢやつた。

老いたる男 何ぢや。何が拉はれたてや。

千代 われら常丸ぢや。われら小さい男をの子ぢや。

老いたる男 はて、さて、今時この都に鷲の鳥はおぢやるまいと
思うたが。

千代 いや鷲の鳥ではおぢやらぬ。鷲の鳥ではおぢやらぬ。

老いたる男 鷲の鳥でおぢやらぬなら手長猿かいのう。

千代 いやいやそれでもおぢやらぬ。

老いたる男 さらにお山の女取めとりでもおぢやつたかいのう。

千代 人さらひぢや。人さらひぢや。

老いたる男 何。人さらひとは近頃面妖なことぢや。何処どこから来

て、何の方角どに隠れて行いたかの。

千代 （泣き乍ながら）何処どこからも来ぬ。何処へも行かぬ。

老いたる男 其方そなたは泣いて許ばかりおぢやつては、しやほに分らぬわ。

千代 （大声にて。）あの南蛮寺が拉つたのぢや。

菊枝 戻り来る。

菊枝 何ぢや。何ぢや。何ぢや。

千代 南蛮寺がわれら常丸を拉つておぢやつた。

菊枝 はれ！（氣絶す。）

老いたる男 （独白）あれ、あれ、また一つ事が殖をなごえた。女子と

いふものは理が分らいで困るものぢや。——（菊枝に。）やい

の、女子よ。南蛮寺が人を拉らふわけはしやほにおぢやらぬ。

——（千代に。）俺おらはな、この女子を介抱しておぢやるさかいに、其方は早やう行て、寺の内に其方が子を捜して来きやれ。何も不思議があるものか。不思議は皆心から湧わくものぢや。疑心暗鬼ぢや。何も恐ろしい事はおぢやらぬさかいに、早う行て子を捜しておぢやれ。子等は法会ほふゑの唄うたにな、聞き惚とれておぢやるやろ。

千代 ほんまに怪けしうはないお寺か。

老いたる男 なかなか、なかなか。

千代 さらにあの中に天狗のやうな人食ひとくひびと人がおぢやるといふは、

ありやほんまに虚そらごと事ことでおぢやるかいな。

老いたる男 何の、その様な事やうがおぢやるものか。諄くどい女子ぢや。

な。この世の中に天狗、人食人などはおぢやらぬわい。ありや、南蛮の坊主共ぢや。日もはや暮れる。早う行ておぢやれ。（千代門内に入る。）

老いたる男 やいの、知らぬ女子よ。早う目を覚さましや。いやさ、

正氣に帰りおれと申すにな。やれ、女子よ。（女の背を打つ。）

菊枝 あ、あ、あれ、あれ。まだ大きな蛇じやたい体が。蛇体が：

：

老いたる男 愚な女子ぢや。早う正氣に歸られい。な。女子よ。

邪心を以て見るが故に、藁なを縋うて造りたる縄も蛇体と見えるのぢや。

菊枝 それぢやと云うて……今の蛇体は？……

この間に、南蛮寺の門扉内より音もなく自から閉まる。

老いたる男 は。やれ、やれ。内なる門を鎖す男よ。やよ、男よ。

その扉は今少時しばしがほど明けて置かれよ。やよ。少時が程ぢや。

(怒りて。) はれ。内に人が入りておぢやるといふにな。(門

全く閉さる。内より女の声聞こゆ。)

女の声 あれ、あれ、あれ、あれえ。

老いたる男 (両手もて門の扉を押し試みつつ。) 誰ぢや。門番

の男よ。扉を開けよといふに。え。開けぬ積りか。何。開けぬ

いや、いや、屹度きつと開けぬ積りぢやな。好し、それなら此方こなたにも

する術があるぞよ。——(菊枝に。) やいの、女子よ。そなた

は少時しばらく此処に待つておぢやれ。——何、此方にもする術がある

ぢやまで。——俺おらは直ぢきこの附近あたりに住まふものぢや。われら家
に往いて持もつて来るものがおぢやるわ。少しばし時じがほどここに待まちたれ
よ。

菊枝 わらは 妾一人が此処にかえ？

老いたる男 何、一人にてはいやぢやと申すか。

菊枝 さにてもおりないが、……妾は恐やの。

老いたる男 何のこと。何のこと。あれ向おもひから男子となが大勢来る
わい。そんならほんの暫しばしがほどぢや。(去)

行人二三下手より登場。

菊枝 まをし、まをし、そこな方々よ。今此処に恐おそしい事が起おこり
候まうよ。

第一の人 何ぢや、恐ろしい事とは。

菊枝 あの、南蛮寺が人を拉うておぢやつたのぢや。

第二の人 何。南蛮寺が人を拉つておぢやつたと言やるか。やれ、

それまこと
夫は真か。誓せいもん文か。

菊枝 何で妾がこの年齢としして、益やくない嘘をつきませうや。

第一の人 して何処いづくの誰が拉ひはれたのぢや。

菊枝 妾の知辺しるべぢや。お千代母子おやこがさらはれておぢやつたのぢや。

第二の人 やあれ、やあれ、恐ろしい事ぢや。むかしまつかう南

無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

第一の人 あれ見よ。最早もはや空に星が出そめたさうな。

第二の人 急いそぎまゐらうよ。(行人行きすぎむとす)

菊枝 まをし、まをし、方々よ。今妾の連つれが来るほどに、いま少ほらく

時ばらく此処に止まり候へ。妾一人にては物おそろしや。こはや。

行人等 我等も急ぎの用事がおぢやるわ。

菊枝 さても無情つれなの人々候ぞや。

行人なほも行き去らむとす。忽たちまち下手の方賑はしき唄の声

(楽屋にて囃はやし)。若きうかれ男、舞妓白萩。つづきて屋号

を染めたる提灯を持つ男。燈ひはいまだ点とほされず。登場。

うかれ男 (扇子もて膝をうち拍子とりとり、唄。)

鐘さへ鳴れば 去いなうとおしやる。ここは仏法東漸の源、

初夜後夜の鐘は いつも鳴る。

ははははは。 (白萩に) 何とて人立ひとだちがすることぢや。

白萩 さればいの、私も案じて居たのぢやわいの。
わたし

提灯を持ちたる男 (私かに) 此処は南蛮寺ぢや。
ひそ

うかれ男 何ぢや。南蛮寺ぢや。へへ、ははははは。

提灯を持ちたる男 笑ひ事では御座りませぬぞよ、早う参りませう。

うかれ男 南蛮寺なりや恐いことはおりにない。

白萩 あの晩の鐘は、寺の深い井の底から湧いてくるといふは真かいなあ。

うかれ男 (故更に嚴肅の貌を装ひ) や、それこそは邪法の内秘、
きりしたん 吉利支丹宗門の真言、しんごん 軽々しうは教へられぬ。したが白萩
かろがろ よく聞きや。お許の怨じはまこと心底の胸から出やるか、乃至
もと へん

は唇おもての面からか。いやさ、それを告げいでは、ちやくと教へられぬわい。

白萩 知らぬ、知らぬ、教へなうてもよいわいな。

うかれ男 はてさて、之これは剛きつい返答。——（忽ち側を向き大声）

こりや！

さき嚮よりこの一群に、着きつ、離れつ随ひ来れる油売、実は

いるまん伊留満喜三郎、油桶は持たで、青き頭巾かぶれる。叱咤せ

られ、袖翳かざしてすさる。

うかれ男 はて怪いぶかしい男 をの共ぢや。

白萩 あの男なら、とうから我等の後に随ついて参りました。気味

わるいことぢやわいな。

うかれ男 何の、措け、措け。

忽ち寺の内に遠波とほなみのごとき、奇しき妙音楽起る。(羅ろまん)

曼ちっしゆ的なる西洋管絃樂)、さきに行き去らむとせし人々

も踵を返す。

第一の人 何ぢや、賑かな樂がくしやう声ぢや。

第二の人 寺の中に何かおぢやるさうな。

第一の人 何ぞ珍らしい異宗の祭典と見えるよな。些ちと覗のぞいて見

たいものぢや。

第二の人 なれども門は閉されたり。はて、如何いかが致いたいてか内を見

る工夫はおぢやるまいかな。

伊留満喜三郎 (突然門扉の内に屈かがみて) やいの、やいの、皆みなの

衆よ。ここの門の扉とびらに細い隙がおぢやつたぞや。はれ、見られ
い。や、何とまあ美しい絵ぢや。唐、天竺は愚か、羅馬ろおま、以譜いげ
利亞りやにも見られぬ凶ぢや。桜に善う似た麗うるはしい花の樹この間に、
はれ白象が並んでおぢやるわ。若い女子等が青い瓶から甘露かんろを
酌くんでおぢやるわ。赤い坊ほんさま様ぢや。噴ふきあげ泉からさらさらと黄
金が流るる。真昼のやうに日が照るわ。はれ、見られい、見ら
れい。翼はねの生えた可愛い稚子ちごが舞ひながらおぢやつたわ。はれ、
皆が一斉に祈を上げておぢやるわ。

樂声快活に、敬虔に、やがて急激に、やや誘惑的に、更に
また憂鬱に。

菊枝　して、して、……あの千代どのもおぢやるかいな。

伊留満喜三郎 千代殿とは何ぢや。何処の人ぢや。

菊枝 まだ二十五とはならぬ女子ぢや。なれども二人の母人ぢ

や。その妹の子はこの春死んでおぢやつたのぢや。

伊留満喜三郎 おぢやるわ。おぢやるは。それもおぢやるわ。

菊枝 せがれ 倅の常丸どのもおぢやるかいのう。

伊留満喜三郎 おぢやるとも、おぢやるとも、皆おぢやるわ。みんな

菊枝 はれ。お祭を見ておぢやるかいのう。何とまあおとましい

人々ぢや。こなた 此方は強う案じておぢやつたのになあ。きつ

伊留満喜三郎 いや、皆はもう神さまになつて、美しい翼が生え

ておぢやるのぢや。はれ、美しい行列ぢや。歌唄うておぢやる

わ。

菊枝 何と戯たはけた事をいふ人ぢや。妾は嚮さきから、真まか、真かと聞
いておぢやつたのに。おとましいことぢや。

伊留満喜三郎 はれ黒い尼達が来ておぢやつた。日が曇つた……。
うかれ男 やい。油あぶら売うり奴め。そこ退のきやれ。——や、や、如何に
も此処に細い隙間があるわ。やれ、やれ、某それがしも一つ覗いて呉れ
むず。

白萩 見えたかいなあ。何ぞ見えたかいなあ。
うかれ男 善う見える。善う見える。はれ、偽いつはりの底が善う見える。
白萩 ほんまに何が見えるぞいなあ。

うかれ男 南蛮寺の台所が善う見えるわい。聞きや。はれ。や、
何とも云へぬ名みやうがう香かうのかをり、身も心も消ゆるやうぢや。四

方には華の瓔珞、金銀、錦の幡天蓋、瑇瑁の障子、水晶の簾。まつたそが中の御厨子の本尊、妖媚なる天女の姿、匂ひやかなる雪の肌、消たば消ちなむ目見の霞……造りも造りたる偽の御堂よな。（門扉の隙より目を離し、唄ふがごとき調子にて）さて、偽りとは知りながら悟られぬのがそれ何やらの道喃、白萩小女郎、昔の人は秀句吐くな。

白萩 あれまたいやらしい戯れごと。

うかれ男 何で某がいふことが戯言であらうぞや。戯れごととはお許等のいふことぢや。いとし、恋しも口の先、腹の内に
は舌出して、いやさ（唄。）

千たび百たびおしやるとも、なるまじものをうつつな其

方なたや、われに主ぬしある、思ひとまれよ。

などと、はは、南蛮寺の玄関で、誰やらがよい歌唄うておぢや
つたわ。

白萩 あれまた人をなぶるわいなあ。

伊留満喜三郎 (再び門扉に倚りたるが、突然声高に) 波羅葦はらいそ増

ぢや、波羅葦増ぢや。

第三の人 真か、まことか。

伊留満喜三郎 じええずす、まりや。波羅葦はらいそ増雲。波羅葦増雲。

門内の樂声更に壮さかんになる。忽ち下手に人声。やがて嚮の

老いたる男大なる槌かけやもちて出づ。

老いたる男 此方にもする術すべがあるのぢや。

菊枝 やれやれ、爺おやぢさま。久しう待たしておぢやつたなあ。

老いたる男 されば皆の者よ。そこ退のきやれ。そこ退きやれ。やい、

危いわえ。(門内楽声や息む。老いたる男、携へ来れる大槌を拳

げて烈しく門扉をうつ。)——はら、やいの、おう。はら、や

いの、おう。(人々怪しき驚愕の声出しつつ眺む。老いたる男

少時槌の手を休めて、人々を顧みながら)皆の衆は、などで、

さは黙もだしておぢやるぞや。念仏申さぬか。念仏申さぬか。——

(再び槌を取りあげ)南無たいしやく帝たいしやく釈たいしやく四天王、五道みやうくわん冥みやうくわん官みやうくわん、日

本伊勢大神宮、八幡大菩薩、春日大明神其他うぢがみ氏神、南無阿弥

陀仏。はら、やいの、おう、南無阿弥陀仏。はら、やいの、お

う、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。——(汗を流し、いたくつか労

れたる様に手を休めつつ)や。さても堅い扉ぢやわい。

*

*

*

*

下手より五六の学僧(学頭、所化^{しよけ}長順、所化乗円其他)登場。何れも黒き衣、黒き頭巾。又長き杖を持つ。但し先頭の所化乗円は『妙法院』と記されたる提灯を持ちたり。提灯には燈ともさる。群ぬち^や漸にさはがし。

学頭 やよ、人々、何とてさは雑言致すぞ。

さはぎ次第に高まる。

学頭 何とてさは雑言致すぞと申すにな。

第一の所化 所化長順が気が狂うてござる。

学頭 何とな？

第一の所化 所化長順が気が狂うてござる。

長順 否とよ。ふつつに狂ひなどは致さぬ。

第一の所化 (長順に) 御宗門を疑ふが、狂はいで何としようぞ。

長順 ふつつに狂ひなどは致さぬ。

第一の所化 その証あかし掘あが立つか。

長順 立たいでか。わが申まをしひらき開はこのやうぢや。(長順腕より

数珠を外し、地上に抛ちて足もて踏む。)

第一の所化 咄とつ。仕おつたな。(皆々呆れ怒るこなし)

乗円 (憂はしげに、長順に向ひ) 御宗門を足蹴あしげに致いたな。

長順 足蹴は愚か、矢を向け申すわ。

第一の所化 やい。よくもほざいたな。はは、御宗門に弓引くと

申すからは必定新たなる見証けんしょうが付いたであらうな。

長順 見証なんどとは事をかしや。釈迦牟尼せいきやぼちは畢ひつきやう竟愚人、苦

勞性なる摩訶陀の王子、天台智者は大法螺吹おほぼらうきき、まつた伝教は山

師の支店でみせ。

第一の所化 黙り召され！

長順 何とて黙らうぞ。仏陀の教は嘘八百、人を欺だまいて可惜あたらしき

若き命をむざむざと枯木の如く朽くちさす教……（やうやう夢幻

的になり）某それがし在家の折柄は蝴蝶は花に舞ひ戯れ、鳥が歌へばわ

が心、君の心もうち和なごみ（小唄の節になりて）花の降る夕暮は、

思へど思はぬ振りをして、喃なう、思ひやせに瘦せ候ひしが……

（再び我に返りたるが如く）教けうくわん觀 二門が何の真諦しんたい、三觀

十乗が何の悟道さとりのそれがし。某山に入りてより、四年四月は日夜撓よとせまず勤ごんぎやう
 行 苦行、ひたすらに頓とんぜん漸秘密の理を追へども……（また
 咏嘆の調にて）かの日の幸に比べむ幸なく、わが美よき人に似る
 神も……

乗円 長順真に正気でか

長順 正気で無うて何としようぞ。

第一の所化 聞きしにまさる長順が乱心。今は堪忍の時ならず。

（杖もて長順を打たむとす。乗円之をかばふ。）

乗円 ま、ま、待つて下されい。之は長順の正気では御座りませぬ。
 必ひつぢやう定ぢやう 悪魔波はしゆん旬しゆんの仕業しわざ。……（忽ち南蛮寺の門に気付くつたくきて）あれ、此処は邪法の窟宅くつたく、南蛮寺の門前なるよな。さ

てこそ必定邪法の手練てれん……

長順 ……あれ唄が聞こえるわ。いとしい人が呼ぶさうな……

乗円 (憂はしげに) 長順、長順。其方はまた迷うたさうな。修行が足りぬぞよ、修行が足りぬぞよ。

長順 乗円、其方もわが心はえ汲くむまいな。(心弱く乗円の腕にもたれる。)

忽ち南蛮寺の前にてけたたましき響す。沙門の一行門前なる群集に近づく。

老いたる男 (再び大槌もて門扉をうつ。) はて、さて怪けしい扉ぢや。え、まだかや。まだかや。うん、や、ほい。南無阿弥陀仏。はら、やいの、おう。南無阿弥陀仏。え、まだかや。まだ

かや。はら、やいの、おう。南無阿弥陀仏。

老いたる男、最後の―撃をなさむとする所に、忽ち眩暈めくるめき倒れ、槌は手を離れて地上に落つ。

門内楽声（たとへば独逸国リヒヤルト、ストラウスがツアラツストラの曲の末段の如き）嵐の如く高まる。

菊枝（うち驚きて）や。これはおやぢ。爺さまうぢのう。

伊留満喜三郎（菊枝を遮りさへぎ）見やれ、こりや神罰ぢや。南蛮寺の罰ぢや。

菊枝 何と、それは真かいなあ。

伊留満喜三郎 大神でいゆすの威力の恐ろしさを、遅かりしな、今覚りしか。素もとより不信の極悪人ごくあくびと、此儘に打ち捨て置き、風ふ

来犬うらいぬにな食す可きなれど、今日は異例の情をもて、聖さんまりやに

祈りを上げ蘇よみがへ生かへらして呉れむずらむ。 (老いたる男の傍に進

み寄り口に呪文を唱ふ。老いたる男目ざむ。)

伊留満喜三郎 何と、老おいほれ耄ほれ、正気に歸つたか。

老いたる男 (いぶかしげに四下あたりを見廻はす貌) ここは何処いづこぢや、

何処ぢや。

伊留満喜三郎 ここは四条の真まン中ぢや。南蛮寺の門前ぢや。

老いたる男 (驚き逃げ去らむとして) 何ぢや。南蛮寺の門前ぢ

やてや。

伊留満喜三郎 こや、逃げ無いでも可いわ。心を落付けいやい。

某誠心を籠めて大神に祈りたれば汝が罪は許されたり。――

(衆に向ひ) 貴き御堂の門扉を撃ち天主の威靈を汚す罪によりて、思ふだにも恐ろしき彼の暗黒のいんへるの、解けば即ち焦熱地獄のその底に落ちゆく可き所なるを、でいゆすの御教みをしへこの国に入りてより、未だ間まもなき事なれば、無智盲昧まうまいの蒼たみく民さの疑ひ怪しむそれ故に、心にもなき大罪に陥らむを憐み、それがし某祈念を凝こらしたれば彼の罪も許されたのぢや。皆々有り難き御恵の御礼申上げたが可よからうぞ。——さんた、まりや。さんた、まりや。はらいそうぜんしゆまろ波羅葦増雲善主磨。

皆々さんたまりや、じええずす、まりやなどよぶ。

うかれ男 やあれ、やあれ。そこな痴人しれびと、知らぬ為まねして聞いてあれば片腹まうごんきごいたたい妄言綺語。

伊留満喜三郎 何、妄言綺語とな。雑言も程こそあれ、世にも恐ろしき神の威霊の近き^{しるし}験を今見ざるか。かかる賤しき油売の姿にわが身を扮^やつしてあれば、貴き言葉^{ことば}も疑はるるなれ——（伊留満喜三郎俄に油売の服装を脱ぎて緑の地に金糸の縁飾をとりたる邪宗門僧侶の職服にかはる。右手に高く金色の十字架像を翳^{かぎ}す。）今までは包みこそ居^ゐれ、何か隠さむ。われこそ真は大神でいゆすが僕^{しもべ}、伊留満^{いるまん}あんとにゆすでおぢやるぞ。

人々たじろぐ。或は『じええずす、まりや』などよぶ。

伊留満喜三郎 それわが神でいゆすは天地六合の唯一神、宇宙万象の能造の主、天地空寂のうちに万象を造り、かるが故に日月星宿光を放つて、明歴々として東湧西没の時を違へず、地には

千木万草あつて、飛鳥落葉の期を誤たず。百万の烝じよう民みん善よく
 この神を拝するときには死後生を波羅葦増雲の樂園うに享うく。然る
 に、耳目あれども此神を知らず、猥みだりに神徳そこなを害そこなふものは、即
 ちいんへるのの苦淵そもそに沈む。抑そもそも波羅葦増の国と申すは、四時
 花咲き、鳥歌ひ、果実とぎ季ときなく実り、生あれども死なく、明あれ
 ども暗なく、悔なく、迷なく、苦なく、禍なく、白象びやくざう鰐がくぎ魚よ
 も人に戯れ、河水甘露の味を宿して、白檀びやくだん蘆ろくわい薈かいのかをり園
 に満ちたり。失うせにしものは此こゝに見出みだされ、求こゝむるものは此こゝに
 備へいはり、家兵へいせん燹せんに焼かるる憂なく、愛つまする夫つまを戦場に死せし
 めず、和楽わげの和雅音わげおん大空に棚引いたり。如何に人々、今こそ波
 羅葦増雲近づけり。時に遅るな、祈を上げよ。おおらつしよ、

おおらつしよ。さんたまりや。死後しやうてん生なま天てん波羅葦增雲善主磨。
 人々或は之に和す。門内には法悦ほふえつしんげう信樂しんがくの妙音樂めうおんがく（中
 世の宗教樂）。所化乗円提灯を翳して伊留満に迫る。

乗円 伊留満あんとにゆすと申すは其方か。そなた

伊留満喜三郎 如何にも伊留満あんとにゆすは此方ぢや。このほう

乗円 咄、此老狐らうこ、猥みだりに愚民を誑たぶらかし居るな。

伊留満喜三郎 何とて人を誑たぶらかさうや。

乗円 然らば借問しゃもんす。でいゆす天地を造りしとは真か。

伊留満喜三郎 説くにや及ぶ。

乗円 さらば其でいゆすをば誰が造りしぞ。

伊留満喜三郎 でいゆすこそは天地の唯一ゆゐいつしん神。誰も造りしもの

はおぢやらぬ。

乗円 は、は、でいゆすを造りしものが無うて、でいゆす能く天
地万象を造りしとな。然らばでいゆすは即ち五塵ごちんの塊くわい、五蘊ごうんの
泉、憎愛簡ぞうあい 択かんたくの源とこそ見ゆれ。

伊留満喜三郎 然らば問はむ。如何なるか是れ仏法。

乗円 即心即仏そくしんそくぶつ。

伊留満喜三郎 如何なるか是れ即心即仏。

乗円 即心即仏。

伊留満忽ち隠し持ちたる短刀を抜いて、乗円が胸に閃かす。

伊留満喜三郎 如何なるか是れ仏ぶつ。

乗円 (平然として) 法性は之れ無知亦無得、無色亦無受相むちやくむとくむしきやくむじゆさうぎや

行識うしき。

うかれ男 (つと進み伊留満の手を押へて) 宗論に刃物三昧は卑怯なるぞ。

伊留満喜三郎 (うかれ男に引かれて二足三足、後へ退すりながら) 無知亦無得とは珍らしや。本来空ならばなどて天地万象が生ぜむや。

乗円 諸法空相、不生ふしやうふめつ不滅、不垢ふくふじやう不淨、不増不減。

伊留満喜三郎 何と諸法が空相とや。烏澹をこがましき似非えせきやうもん經文よな。本来諸法が空相なら、何ぞ空くうを空ずるの相あらむや。誠や大神でいゆすは之れ天地能造の主、人類の起源。抑も天地虚曠晦冥、でいゆす光あれと呼べば即ち光あり。人あれといへば即

ち人あり。諸人何ぞこの大神を崇めあがざるや。何ぞ猥りに神威を疑ひ、大神の怒、天地滅尽、じゆいそぜらるの時来らむを恐れざるや。何ぞてしひりいないるを取り自ら己が身を打つて懺ざんげ悔らひ礼はい拜はいせざる。何ぞさんた、くるすを吻すひて、偏ひとへにおらつしよを唱へざる。波羅葦増雲近づけり。祈りを上げよ。おおらつしよ、おおらつしよ、さんたまりや。

伊留満高く金十字架を頭上に捧げ、ひたすらに聖頌を唱ふ。門内の楽曲、厳肅豊麗なる寺院楽律よりやうやう神秘奇峭なる近世的問題楽曲に移る。四下やうやうさわがしくなる。

第一の人 あれ伴ばてれん天連が妖術を始めたぞ。

第二の人 何ぢや妖術ぢやてや。

舞台やうやく赤くかすみ来り、後景なる寺の石垣もこ模糊として遠く退き、人々の形も朦朧として定かならず。楽音の旋律更に激越想壮の度を加へ、之に諧和せざる梵音はた三絃の声も、囂がうがう々々として亦その中に雑まじる。

乗円 遠離一切顛倒夢想。

伊留満喜三郎 ろうだつと、どみのむ、おむねす、でんと。

乗円 究竟涅槃。

忽ち所化長順群より離れ、舞台の中央に來り、舞妓白萩にすれ違ひ、

長順 ふつ、其方そなたは……

白萩袖を翳して退く。これより長順は白萩を追ひ之にから

む。うかれ男その間に入りて之を妨ぐる仕草。この三人の間に往々また伊留満の姿現はる。右手に高く金十字架を捧ぐ。金の十字架煌々と光る。沙門等は下手の方かた、程よき所に立ち並ぶ。楽声、沙門、伊留満等の祈祷唱讚の声、諸人の驚き叫ぶ声、紛々囂々ととだえとだえにひびらぐ。

長順 ふつ。其方はお鶴どのではござらぬか。

白萩 さういふお前は源さまか。

長順 あな、珍らしや、お鶴どの其方は健まめでおぢやつたか。

白萩 あれなつかしや源さま。

長順 最早其方はこの世にはおりないものと思ひあきらめ……

白萩 怨めしや源さま。

うかれ男 やよ白萩、時が遅うなるわ、早やう罷らうと申すにな。

長順 (回想に耽るが如く夢幻的に、) 彼の時其方は全盛の歌ひ

女、殊に但馬守殿が執着のおもひ者、われは貧しき沙門の小
 悴、どうせ儘ならぬ二人の中、思ふが迷と人にもいはれ、

白萩 お前はあむまりひとり都合点……

長順 え、ままよ、さうなりや人をも殺し、われも死に、無間地

獄に落ちば落ちと、やみよ暗夜の辻にもさまよひしが……

白萩 源さまお前もあむまりな、などて一言その事をわたしに明
 してくれなんだ……

長順 思へば女一人のために、身を殺さむは、さすが世間の手前、
 人の思はくも恥かしく、此世ながらのぼんねはん梵涅槃、さうもん桑門の道に

入りもしたれ、そなたと分れて四年の間……
よとせ

白萩 わたしや夜昼泣いて泣いて……

うかれ男 早う去なうと申すにな。

白萩 あれ諄くどい衆ぢや。帰りたくば一人で行なしやんせいなあ。

長順 始めは山の金鼓きんこの音、梵音ぼんのんがく樂を珍らしみ、勤行唱讚に耽

りしが……

白萩 そんならお前は、私わしのことはうち忘れてか……

長順 止観の窓を押し開き、四教の奥に尋ね入れば、無明むみやうの流

れは法相の大円鏡智と変りはすれ……

白萩 ……はれ。

長順 幼き時ゆこがれたる、ほの珍らかにいと甘き、いとあえか

にもなつかしき『不可思議』の目見まみは我胸まより全く消えうせ、
 遺のこれるは氷の如くうき空の影。——（演説の調にて）法相真しんによ如と
 いふと雖いへども之れ仏陀乃至伝教等沙門の頭を写したる幻の塔、夢
 の伽藍、どうせ人の頭より出たるほどのもの故、学んで悟られ
 ぬ筈はおりない。悟といふは益やくない徒勞。わが望むところは彼
 の『不可思議』、解けがたき命の謎、一たび捨てにたる無明煩
 悩ぢや。天台乃至伝教はわが胸中のこの宝を盗みたる、いはば
 物取強盜ぢや。宗門を蹴らいで何としようぞ。

*

*

*

*

所化等

（遠くの方にて）

羯ぎやあてい諦、羯ぎやあてい諦、波羅はらぎやあてい羯ぎやあてい諦、波羅はらそう僧羯ぎやあてい諦。

伊留満喜三郎 (前方に立ち現はれ) おらつしよ、おらつしよ。

ぐろりや、はとり、えひりおゑぬ、ぴりてゆい、さんくと。

* * *

忽ち門内沈痛悲壮なるゐおろんちえろのそろ。

長順 (舞踊の間に黒き法衣を脱ぎ華美なる姿となる) あれ、南

蛮寺の中に奇くしき響きがしておぢやるわ。(奥よりゆきて) あ

の響ぢや、あの響ぢや。わがこがるるはあの響ぢや。白萩はや

うおぢやれ、あの響ぢや。あの響ぢや。

伊留満喜三郎 ベねぢくちゆす、どみにす、でゆす、いすらえる。

ぜじゆきりすて。さんたまりや。

遠き方に、再びかすかに童子等が夕やけの唄。舞台、紅色

の靄はやうやう消えゆきて、さびしき青色の光となる。後景の石垣再び鮮かに前に出づ。門内の楽音も亦ややに静まりゆく。忽ち上手に気味わるき人声。

声 やい、こりや、こりや、喜三郎よ。

褐色の衣。袴の股ももだち立高く取つたる、年老い瘦せ屈みたる侍、大刀の柄に手をかけつつ上手より登場。

老いたる侍 (憤怒の相貌恐ろしく、手も体もうち顫へつつ) やい、喜三郎よ。其方そちはよつくもまた此処ここへ来ておぢやつたな。

伊留満喜三郎 (十字架にて眼をかばひながら) や、叔父上か。老いたる侍 只今其方そちの母御はな……え、思ふだに涙なみだが霰こぼれるわ

……其方の不孝をう、怨み、怨み死にに死んでおぢやつたのぢ

や。

伊留満喜三郎 ええ。母人が死なれたとや。

老いたる侍 不孝者奴！

伊留満喜三郎 (首うなだれ、思ひ沈むこなし、ややありて—独
白) この大神の御為めには、母も捨て、妻、子も捨てよと……

ええ、聖經にも記されておぢやるわ——叔父上！

老いたる侍 不孝の罪はまだしもあれ、汚けがらはしき異国の邪法に
迷ひ、剩あまつさへ、猥りに愚人を惑はすとは……

伊留満喜三郎 え、惑はすと……

老いたる侍 ……不、不、不便ふびんながら其方の命は、父御ててごに代りこ

の叔父が……え、思ひ知れ、天の罰ぢや。

老いたる侍、忽ち刀を抜いて伊留満の首を落す。四圍あたりの人々、皆驚き恐れ『人殺ぢや、人殺ぢや』などいひつつ逃れ去る。沙門等、長順、白萩のみのこる。

老いたる侍（刀の血を拭ひ、鞆に納めながら、四下の人は眼にも入らざるが如く、つぶつぶと独ひとりご語つ。）……御ご先祖ごせんぞへの申訳ぢや……御、御、御先祖への申訳ぢや……（よろめきつつ再び上手の方より去。）

第一の所化（一步前に踏み出し乍ら）やれ、口くちをし惜や、南蛮寺の妖術ばかめに化されておぢやつたとは。

長順（夢中に老いたる侍の後を追ひゆきて）お侍、些ちと待たれい。

第一の所化 (忽ち長順の領えりを捉へて) こや、長順。

長順 離しやれ、そこ離しやれい。

第一の所化 お主ぬしは血相かへて何する積りぢやえ。

長順 ふむ、何を隠いさう——徒いたづらに俗世間の義理人情に囚こへられ、

新しき教の心もえ覚さとらぬ俗人原ぼら、あの老耄の瘦首ちよんぎ丁切り、吉

利支丹宗へわが入門の手土産てみやげにな致さむ所存。

第一の所化 何と、吉利支丹へ入門とな。

長順 新しき不可思議それがしを某は望むのぢや。

第一の所化 やあい、同学衆よ。長順が吉利支丹へ改宗ぢやと申

し居るわ。

所化等 え、邪宗へ改宗ぢやてや。

再び門内に樂声。あこがるるが如きろまんちつしゆの曲節。

長順 おおあの声にあくがるるのぢや。

乗円 (痛ましき顔容をなして) 長順! (長順眼差を落す。)

学頭 如何に方々、長順が墮落の程はもはや一毫の疑も容れぬ所ぢや。容捨は無用ぢや。棒を与へよ。

第一の所化 長順今ぞ思ひ知れ! (杖を以て打たむとす。)

乗円 (之を遮りて) ま、ま、待たれい、方々、第一の答はこの

乗円に任せられよ。——やよ、長順。煩惱六根の爲めに妨げられたる其方の心では、わが言はえ分るまいが、古き法類ぢや、少時わがいふことを聞かれよ。其方とわれとはふとしたる奇縁により、兄弟も及ばざる交を結びたりしが、かの時誓ひし言の葉

は、まだえ忘れは致すまいがな。

長順 ふつ。

乗円 大恩教王の御教は 日月輪にちぐわつりんの如く明かれども、波羅密多はらみだの岸は遠く、鈍根痴愚の我等風情に求道の道は中々の難渋、それ故に互に諫めいさ励まし、過あれば戒め懲らし、よしや歩あゆみは遅からうとも、いやさ精進しやうじん懈怠けんたいはあるまいと、誓ひし言葉を覚えて居やるか。

長順 如何にも忘れは致さないが……

乗円 さらば長順。無慙なれども其方そなたが止観を曇らする邪見の源を断ち呉れむず。南無阿弥陀仏。(右手にて腰なる如意を取り、長順の額を打つ。) 護法の答しもと、斬魔の劍ぢや。

所化等 『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』と唱へ乍ら、杖を以て長順を打つ。舞妓白萩をろをろとして之をかばふ。長順倒る。やがて沙門の一行、列をなして上手の方に退く。

第一の所化 (長順を顧みつつ) やい、長順、莊嚴光明の究竟くきやう

道だう、般若波羅密多には行きもせえで、女人にょにんの袖に隠ると

は、はて、さて、お主ぬしたちに善う似合うた邪宗門の勤行よな。

衆僧列をなし徐ろおもむに上手より去らむとす。

学頭 はくしゆうとうちやうせつ 白衆等 聽説、くわうこんぶしやうけい 黄昏無常偈。

所化等 しじつきくわ 此日己過、べいせきすゐげん 命即衰減、じよせうするぎよ 如少水魚、しいうからく 斯有何樂。

長順 (傷に呻きながら後へより衆僧に呼びかく。) やよ、人々。

などで、徒いたづらに古人の教ちやくに着しておぢやるのぢや。此不思議を見

ざるか。この不可思議を。

門内の悲しき楽音に交はりて小鐘声。

所化等

諸衆等、たうきんせいしん当勤精進、じよきうとうてん如救頭燃、

たんでんくこう但念苦空、ぶ無

しやうきんしん常勤慎、ぼくはういつ莫放逸。

長順

よろめ（蹠跟きながら立ち上りて、

南蛮寺の門扉に至り倚る。）

おお、この不可思議に酔はいで、何の妙、実相がおぢやらうものか。心の底に生まるる赤児の声は、いつもこの不可思議にこがれて泣くのぢや。

所化等のうち、或は首をめぐ回らして長順を顧るものあり。

学頭（所化等に）天魔波旬のまどはし誘惑に、方々は心を勞すると見

ゆるな。

長順 新なる不可思議の泉にあこがれて泣くのぢや。(倒る)

学頭 しゅじやうむへんせいぐわんど 衆生無辺誓願度、煩惱無辺誓願断、法門無尽誓願知、

無上菩薩誓願証。

所化等 南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥

陀仏。(沙門等ことごと悉く上手より去。)

白萩 源さま。——あれ源さまとしたことが、もう声は聞こえぬ

さうな。まをし源さま。源さまいもう。

長順 (立ち上らむとする如くにして、また倒れ伏す。) おお、

この不可思議にこがるるわ、不可思議にこがるるわ。(声次第

に弱る。)

白萩 あれ、源さま。まだ言葉は聞こえるかいもう。源さま。源

さま。

長順 (細く目を見開き) お鶴どのか。

白萩 (泣き伏しながら) あい、鶴ぢやわいのう。

長順 やよ、お鶴どの。四辺あたりに人は見えぬかいな。

白萩 (四下を見廻して) いやいや、誰も見えぬわいな。今宵は

月も出ぬさうな。

長順 やよ、お鶴どの。もそつと近ちかう其方そなたの耳を貸しや。

白萩 あい。

長順 (言葉を改めて) やよ、鶴。昔其方そなたに恋ひこがれた、あの

時の心がいとしいわい、あの時あの恋がかなうたなら、何も不

可思議は欲しうは無かつたのぢや。(長順瞑目す)

門内の鐘声、小鐘声を以て終る。

幕

(明治四十二年二月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 25 与謝野寛・与謝野晶子・上田敏
・木下杢太郎・吉井勇・小山内薫・長田秀雄・平出修 集」筑摩
書房

1970（昭和45）年4月5日初版第1刷発行

1985（昭和60）年11月10日初版第13刷発行

※底本に見る送り仮名の不統一は、ママとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：福岡茂雄

校正：松永正敏

1998年6月28日公開

2006年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

南蛮寺門前

木下柰太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>